

いゝ手足で探りながら聲をしたらんて行くところねうゝね
で入口の所へ来た斯くの如く三四真闇な中へ引き廻は
された松子の外へ出て寮内者が此の戒壇は心字形の戒
壇と申して常寺の南山某法師の思考に依て作られたも
のであると言はれた是で拝覧する所もなう金は別に用
事になければ拝覧料十五錢と納めて帰途に就いた。

西谷御竹庵巻拝の記

中一同親孝

夕月既に西山に没して空は紺碧の色を増す群鳥遠く彼
方に鳴き出る頃我れは御竹庵の舊地に詣てむと飄然と
宿を出て阪を下り繁れる木間を走り細き畦道を辿り清
き流れの西谷川を渡りて遙に苔むす所基を望めば身は
いつしか常王殿の前にぬかずく所たる幾才の石段は
其首聖祖上人が九年の間朝に冥相の真理を談し夕に安

文讀誦まじく面影を物語るかのやう。誠に宗祖上人は
一代慈悲の尸史を収めて切なる波木井公の請を入れこ
の閑寂なる茅延の山間に逃れて文餘の室中に専ら子弟
の收養に力められたのである。秋は妻戀ふ鹿の聲を聞き、
冬の朝に雪を眺められし草の廣川は實に此の庵である。
又峰に登りては巖を折りみ澤に下りては芥を摘み給ひ
しや。住ひも亦この庵である。我は秋の千草の中を院ろに
遺蹟を履みながら萬感交し胸に迫つて去るにしのひず
あゝけにも傳き雲土よと瞑目合掌することやゝしはら
くやめて我は銀星まはらな宵朧を元來の方へと還ち
急つて飯邊につつた。森の梢には鳥の聲が暮しけに聞え
てゐた。